奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民投句

小中学生の部

令和七年七月度　入賞句一覧

投句数　千五百四十四句

星野　勝　選

特選

まえがみがブワッと上がったせん風き　　大垣市　島根　礼依（小二）

この時期は、季語に「扇風機」を選んだ句がたくさん投句されます。今回も数多くあった中で、情景が最もはっきりと見えたのがこの句です。作者は汗だくになって学校から帰って、真っ先に向かったのが扇風機の前。その風をひとり占めにしたのでしょうか。前髪が一気にあおられて、見ていた家族はクスっと笑っていたかもしれませんね。汗がひいていく作者の爽快感も伝わってくる句です。作者は小学二年生。生活の中の一コマをうまく切り取ることができました。

日焼けして質問ぜめの休み明け　　大垣市　渡部　美柚（小五）

長い夏休みは、一人一人違う思い出が刻まれるときです。休み明け、久しぶりに会った仲間と、期せずして始まる休み中の体験交流会。作者はアウトドア派なのでしょうか。しっかりと日焼けした姿に、仲間も興味津々。次から次へと質問が浴びせられ、ちょっとした記者会見のような状況だったのでしょう。旅行の話、体験談、宿題の話、休み明けの教室の空気が十七音に凝縮されて、光景が目に浮かぶような句になりました。作者はどんな休みを過ごしたのでしょうね。

懸命に光をはなつ蛍たち　　加茂郡川辺町　梅村　伽良莉（中一）

「蛍」はすでに日本書紀に登場します。枕草子にも登場しますね。日本人にとって「蛍」は特別な存在と言えるのかもしれません。成虫となって光を放つ時間は、わずか一～二週間程度といわれます。輝いていられる時間が短い春の桜、夏の蝉なども含め、はかないと感じ心をひかれるからでしょうか。作者はそんな「蛍」が「懸命に」光を放っていると表現しました。短い命を精一杯生きる姿に心を動かされ、エールを送る優しさを感じさせる句になりました。

秀逸

衣替え服の思い出語り合う　　加茂郡川辺町　武田　旭未（中一）

水たまり虹とうつった友の顔　　加茂郡川辺町　藤井　香帆（中三）

夏の雨キュッキュッとなったくつの音　　大垣市　大山　結詢（小六）

ひまわりや息をそろえて東向く　　大垣市　山本　彩夏（小六）

じいちゃん家ふわっと香る夏みかん　　大垣市　小森　真心（小六）

せんぷうき早くこっちにふりむいて　　大垣市　鈴木　咲彩（小二）

たっぷりだキーマカレーになつやさい　　大垣市　中村　安香琳（小三）

くつしたのはいてないとこ日焼けする　　大垣市　悪七　悠理乃（小四）

せんぷうききなこがとんでおおさわぎ　　大垣市　淵　絢音（小五）

僕の背に追いついてきたきゅうり達　　大垣市　小川　旭陽（小五）

入選

夏まつり思いを告げる木の下で　加茂郡川辺町　山下　善一（中一）

ふうりんのすずしい音が響く朝　加茂郡川辺町　木下　愛琉（中三）

風までも青に溶けゆく夏の海　加茂郡川辺町　高井　菜々美（中三）

たんぽぽのわたげ飛ばしていのち生む　揖斐郡池田町　矢橋　南奈（小六）

雨の後少しかくれたにじがでた　大垣市　池田　華穂（小六）

夏の朝くつでいどむよ水たまり　大垣市　佐久間　鈴（小六）

ばしょうさん背中をのぼるけむしさん　大垣市　中村　萌衣（小六）

夏の川かげにかくれるこいがいる　大垣市　小寺　悠太（小六）

ひるごはんながしそうめんとりあいだ　大垣市　早崎　想弥（小二）

おかあさんなつばてになりだいピンチ　大垣市　星野　帆香（小三）

なつまつりおとなきぶんでおしゃれした　大垣市　久野　菜々美（小四）

夏休み家族できんちょう空のたび　大垣市　中村　康誠（小五）

あじさいはじゅうにんといろなかよしだ　大垣市　林　帆奈（小四）

琴の曲めんじょうもらえてあせ光る　大垣市　林田　愛美（小五）

じょうやとう葉桜のかげそびえたつ　大垣市　不破　大翔（小六）

ちょうちんに照らされ歩く夏の夕　大垣市　岡部　もな（小六）

葉ざくらにかこまれうかぶもやい舟　大垣市　兼松　駿斗（小六）

川の上すばやくうごくあめんぼう　大垣市　鈴木　彩娃（小六）

ばしょうのはぐるぐるまわるバネみたい　大垣市　塚原　志穂（小六）

水泳でもぐってたいようからにげる　大垣市　わたなべ　れん（小三）

小中学生の部

選者吟

ポイ破れ金魚の宙を泳ぎたり　まさる